
黄道ノ主

黒羽秋兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄道ノ主

【Nコード】

N9064U

【作者名】

黒羽秋兎

【あらすじ】

男は今、再び彼の地に降り立った。しかし彼に以前の記憶はなく、彼自身の目的も覚えていない。なぜ彼は彼の地に降り立ったのか？ また男は何を失い、何を得るため戦ったのか？

彼自身の記憶、目的が今一度彼に戻った時、今再び・・・彼は立ち上がる。

この作品は作者の処女作です。つたない文章表現等あると思いますが、ご理解のほうお願いします。またアドバイス、誤字脱字報告、

感想の方も受け付けています。

D a y b r e a k ~ 目覚め ~ (前書き)

はじめまして、NaEです。

初連載作でかなり緊張しますが、よろしく願います。

Daybreak ~目覚め~

Side .. ????

暗い・・・、
何も見えない・・・、それに何も感じない。
此処はいつたい何処なんだ？

今までに何秒たったんだ？・・・いや、もしかしたら何時間かもな？
もしかしたら何日、何年かもしれないな・・・。

あれ？

そういえば、今さらだけど俺って誰だっけ？
何処に住んで、父親と母親の名前は？、歳は？誕生日は？

・・・そんなことはいいか、とにかく今は眠いんだ。
少し眼をつぶって、また眼を覚ましたらまた考えよう・・・。

「
きて・・・」

ん、なんなんだ？ 人が寝ようとしてるときに・・・。

「
きてくだs
」

誰だ？

今はとにかく眠いんだ、後にしてくれ・・・。

S
i
d
e
o
u
t.

S i d e .. 睡眠妨害者

「いやいや、紹介の仕方がおかしいですよね!？」

・・・いや、何なんでしょうか？急につっこまなければならぬよ
うな、そんな気が・・・。」

急に天の声が聞こえるなんて、私はどうかしてしまったんでしょうか？

疲れてるんでしょうか、たしかに最近仕事が溜まりに溜まっちゃつて、サボってるわけではないんですが、上司がどんどん私に仕事回してきて・・・

ハア、ほんとにイヤになりますね。

!!

今はそんな話は全然関係ないですね、早くこの人を起こさないと。

「すみません、はやく起きてください!!！」

・・・起きませんね。

困りました、ホントに困りました・・・。

もしかして、このまま起きてくれないと睡眠END確定になっちゃいますか!？それはマズい、マズ過ぎます。

仕方ないですね・・・。

「(スウウウー—————)」

Side out.

俺はふと、意識を取り戻していた。そして目覚めたのと同時に、次に睡眠に誘われて寝てしまったら、もう二度と眼を覚ますことはないことをなんとなくだが悟っていた。

そう、本当に下手をすれば、そのまま永遠に眠ってしまうとわかった時だった。

・・・その爆音が聞こえたのは

「起きてって言うてるでしょー！ー！、早く眼を覚ましなさああー
ー！ーい！ー！ー！ー！」

「つつつつ！ー！ー！？？

っはあ！？nnんなな何？、何だ！？」

「やっと起きてくれましたか。よかったです、これで睡眠END回避ですね。」

「一体、この女は何を言ってるんだ？」

というか未だに心臓が・・・、急にあんな大声で叫ばれたから耳も痛いし、一体何が起こったんだよ。

「――おちつきましたか？」

「ああ・・・。（いまだに耳が痛いけどな）」

状況を分析しよう。

気がついたら目の前真っ暗・・・。

そこで、ない記憶に従って寝ようとしたらたき起こされ、目の前には十中八九美少女と呼ばれるであろうと思われる少女がいた。
うん、かわいい。

——いや！？この状況は冷静に考えなくても、何かが変だ、何かおかしいぞ。

目の前には美少女。

俺は「ここは何処？、私は誰？」的な、テンプレ記憶喪失状態……。

それにこの状況……なんかいろいろとマズイ状態になってるぞ。
俺記憶なくしてるけど、もしかしくなくても犯罪なんて起こしてないよね……。

そんなことを思っていたら……

「えーっと、はじめまして、私は……そうですね。

あなた方の言葉で定義するなら神と呼ばれてる者です。

ただ人ではないんで者という言い方は変ですが。」

自己紹介ですか。

うん、大切ですよね。自己紹介。

いや、待てよ……。

今聞き捨てならない言葉が聞こえたような……。

「もしかして今神って言った？」

「はい」

即答ですか……。

「ま、神とかそういうのは今はいいや

sonでさ、俺も自己紹介したいんだけど……

なぜか自分に関する記憶がこれっぽちもなくて、だから名前を思い出せない状況で……、今何歳で何処にいたかすら思い出せないんだ。」

「それはですね、私が記憶を消したからです。（エッヘン）」

また即答！！sonで胸を張る。

おおっ、けっこう育ちがいいですな……

んっ？

なんか、また聞き捨てならない言葉があったような。

そうっつこむノは
胸
そこじゃアネエナ・・・

オイ、。タシカ、イマ コイツ

俺ノ記憶ヲ「ワタシガケシタ」トカイイヤガッタカ？

side out.

side.. 神

「いや、すみません。

あなた方の言葉で言うところのテンプレ的状况でして、大至急あなたの
力が必y「オイ、。。。」

ふえ？」

えっ、どうしたの？いきなり口調が変わった？

「ヒトサマノ キオクヲ カミダカラツテ カツテニ ケストカ
・ユルサレルトデモ オモツテンノカ？」

「いっ・・・いえ、実はあの・・・「スコシ ダマツテロ!!」ひ
いいい」

「オマエハ ヒトニ トツテ キオクガ ドレダケ タイセツナ
モノカ ワカッテイルノカ？」

「(くくくく)」

「——ワカッテ ヤッタノカ？」

「(くくくくくくk・・・)」

「ソウカ、ソシタラ ヨケイニ タチガ ワルイヨナ。
タトエ アイテガ カミデ アロウトモ

——オシオキダ。」

「（ビクビク！！）」

」

ただいまお説教中です

少々お待ちください（b y作者）

side：神（自称）を折檻していた男

「ふう・・・」

はあ・・・、なんか記憶がないはずなのに、自分の記憶に関する
ことを言われたら、なんかスイッチみたいなのが入っちゃって、さ
っきまでこの自称神怒っていたんだが・・・

「ひっく、、っふ、、もうお嫁にいけない・・・」

泣き！！！？

やばい、ちょっとやりすぎたか？

「あゝ、さすがにやりすぎたな、ごめんな。」

「っふ、、っひ、っく・・・」

でも、わたし・・・、あなたに黙って記憶を消しちゃったのは事
実でしたし・・・」

「あゝ、そのことなんだが・・・
ホント今さらなんだが、もしかして記憶を消したのって必要なこ

とじゃなかったのか？

そうじゃなきゃ、わざわざ関係のない人間の記憶を消したりはしないだろ。」

「——はい、そうですね」

そうか……。必要なことか。

「んじゃ、許すかな。とは言っても許す、許さないの問題以前の問題なんだけどね……。」

「ふえ？」

「記憶を消したことは必要なことで、そうでもしなきゃいけない理由があつたんだろ？
んじゃ、しょうがない。もう起きちゃったことだしな。」

本当にしょうがないよな、この子だって悪気があつた訳じゃなさそうだし。

それに、この子は俺になんか隠してる。もしかしたら俺の過去に関することかもしれないし、まだ俺は記憶を消した理由そのものを聞いている。

なんか、今さらながら自分勝手に怒ってた自分が恥ずかしいな。

「えっ？　でもでも……」

なんか自称神さまが慌ててるが……。てか今さらだけど自分で

神って名乗る割に威厳とか全然ないな、この神さまは。

そんなことはいいか、まずは事情を聞くか。

「記憶を消しちゃったことはもうしょうがない。

もしかしたら記憶があった時には、このよく分からない状況をどうにかできたかも知れないが、今の俺には記憶がないからどうすることもできないからな。

てか、記憶に関してのことなんだから、記憶のある状態じゃこの問題は起こらないし困らないしな。だから、記憶に関してはもういいよ。」

「そうですか、先ほどは慌てちゃったりして、すいませんでした。」

「いや、アレは俺が勝手に熱くなっちゃっただけで、君に非があったわけでは・・・」

でも本当になんであんなに熱くなったんだろう？ないものに関してあんなに怒るなんて・・・。自分のことなのに正気の沙汰とは思えないよな。

それにこの子、なんか急に凛々しくなったな。

まあ、こっちの状態はさっきの可愛いというより綺麗だから、また違う意味でいいんだけど。

「いえ、それでもです。

あなたは、この神界と呼ばれている世界へ呼ばれた者の中でも特例中の特例ですから。」

Daybreak ~目覚め~ (後書き)

いかがでしたか？

というか、いきなり訳わかんないですね・・・

しかし、この訳わかんなさも次話ですべて解決させるつもりです。

では、おそらく次話更新は今日の夜あたりになると思います。

短いですが続きはまた次話に。

舞台裏（作者・・・てかなんで、いきなり主人公キレちゃってるの？ヒロイン泣かせてるし・・・最悪やな・・・、次回後書きで主人公絞めてやる。↑Ans. キレたのも泣かせたのも、あなたが書いたからです）

F a l l i n g そして、すべてが始まる。~ (前書き)

久しぶりです。

まずは、遅れてしまい申し訳ありませんでした。

とりあえず、プロローグ第2話です。

更新など、詳しい話は後書きの方に載せます。

ではお見苦しい点が多々ありますが・・・、プロローグ第2話S t a r tです。

F a l l i n g そして、すべてが始まる。~

S i d e…主人公確定気味の記憶消失の男性A

「俺が特例中の特例だって？」

「はい、その通りです。」

「いや・・・、ちょっと待てくれ。その特例中の特例って一体何なんだ？」

「——もしかして、君が俺の記憶を消さなければならなくなった理由も俺が特例中の特例だってことに関係があるのか？」

これは、あくまで確認だ。そもそも、そうじゃなきゃ腑に落ちないところがあるし・・・

今のところ予想してる答えはYESだが、さあ神様とやら今のところは信用しているが・・・どう答える？

「・・・すいませんが、今はその話は後にさせていただきます。今はとにかく時間が惜しいんです。」

そして、ここからがあなたに話さなければならぬ本題です。

——あなたは『転生』、『転生者』という言葉をご存知ですか？」

はぐらかしたのか？ いや現段階ではいきなりつつこみすぎたのかな。

というか、だいぶ心が落ち着いてきたら、いろいろと話の裏を探るようになってきたな。でも、心のどこかしらでこの子を疑うとい

うことを拒んでいるように思えるな。

とにかく今は、この子の話を聞くとするかな。

「ああ、まあ知識程度にはわかるが……。」

さっきなぜか思い出したのだが、どうやら俺は

- ・ 自分の名前
 - ・ 自分に関する情報
 - ・ 何処で何をしていたのか
- 以外の記憶は少しは残っているようだ。

とは言っても、本当に少しだから全然役には立たないだろうけど……。

その残ってた記憶の中に『転生』や、『転生者』に関するものがあった。

そして、さすがは自分の記憶と言うべきか、1回思い出しただけで思い出せた範囲内すべて理解できてしまった。

にしても『転生』とか『転生者』って元の自分の記憶が正しいのなら、本当に常識を逸脱したやつらだな。その者の行動や存在自体が、本当の本当にやりたい放題にも程があるだろう。

「実際、その『転生』という行為は行われていたのです。」

「（あんぐり……。）」

嘘だろ……。記憶通りなら、現実には行われるわけもない空想

の産物で・・・えっと、たしか某ネット上のSSとかだけの話じゃないのか？

「そりゃすごいな！

だけど、いたって？ 今じゃ行われていないのか？」

「それはですね・・・、」

「それは？」

「いえ、この事を言葉だけで理解してもらうのは難しいでしょうし、さらに時間がかかり過ぎてしまいます。」

「いや、説明してもらわないと話が進まないし、いろいろと困るんだが・・・。」

「その通りですよ。」

なので、・・・実をいうとあまり気が進まないんですが、実際にあなたは一度経験なされてるのですから、過去のあなた自身の経験を今のあなたにフィードバックさせる方法で記憶を戻そうと思います。」

そんな便利な方法があったんだな。なんで気が進まないんだ？ 記憶がないと困ることをこの子は知っているのに、気を失ってる状態だと記憶のフィードバックができないとか・・・。

その線で考えていいのか？

「そのため、今現在あなたにかかっている記憶のプロテクトを一部解除します。

プロテクト項目は『あなたが何者であったか』、

『此処に来る前に何が起きたか?』に関する事についての一部、そして過去のあなたの敵であった『アレ』について』です。」

「やたら話の展開が早いな。というか記憶のプロテクトって? そんなものが俺に掛けられてたのか・・・。」

「——そのプロテクト解除項目だけでも、今の俺にとっては十分か。(てか、敵って?アレってなんだ?)」

その方法でしか今、話を理解する方法がないのなら、早く解除してくれ。」

そうだ、今は一刻でも早くおれ自身の記憶を取り戻したい。たぶん、そこにはとても大事なことがあるはずだから。おそらくこの目の前にいる子についても・・・、さっきからこの子と話していると、なにか引つかかるんだよね。

「わかりました。」

では、すぐにでもプロテクトの解除を始めます。

じっとしていてくださいね、すぐに終わりますから。」

すると、俺の周りに幾何学模様の描かれた陣みたいなものが現れた。これがたぶんだけど、魔法陣と呼ばれるものだろう、本当にこの子神様だったんだな。今さらにだけどやっと確信が持てたような気がする。

「それでは『記憶プロテクトの一部解除を開始します。』

カウント 三

二

一

零』」

これで俺の記憶がもどる。
さあ、俺の記憶に一体何があるんだ

「・・・nね、おねがい、耐えてね『
君』。」

「えっ？今なにk
」

いま、ごめんってきこえ
t

——なんだ、これは、画像？映像？解らないけど、そうかこれが記憶というものか。

俺の名前は。

出身地。年齢。家族構成。いままでどのように生きてきたか。

幾分、経験や記憶が欠如してるようだ。でも、これでも十分。

自分が何者で、どんな人間であったかぐらいはわかった。

次はなんだ？

あの子の言っていた『此処に来る前に何が起きたか？』に関する
ことなのか？

これは・・・、目の前にあの子がいる。

ああ、そうか昔の俺も死んで・・・、この子に救ってもらって、
生き返って・・・。

なるほど、昔の俺も転生者の1人だったのか。

そして・・・、さまざまな世界で戦い戦い戦い、そのたび傷つき。守れた者も、守れた物もたくさんあった。その反対に守れなかった者や物もたくさんあった。

[illegible]

すべては守るために。

そう、すべては……、自分自身の生きていた世界のために。

あれ？俺は何と戦ってたんだ？毎回毎回、戦う相手は皆同じだった。でも・・・アレっていったい何者なんだ？

強く、硬く、賢く、何度でもよみがえり、何度でも俺の邪魔をする。あいつらは一体？

ん？ また情報の種類が変わった。これは・・・、これがあの子が言っていて、昔の俺の邪魔をしていた『アレ』についてか。

おい、なんなんだ。これは・・・
これじゃあ、まるで・・・

う、ウソだ。ウソだウソだウソだ嘘だ嘘だウソだウソだ嘘だウソ
だ嘘だ嘘だウソだウソだ？だ？だ！？だ！！ウソだ！！ウソだ！
！！！！！！

「ウソだああアアああああああアアアアアアアアアアアア
アッアアアアアア、ああああああああああアアああ
あっあっあっあああっあっあっああああアッアアアアア
アアアアアアあああああああっあっあああっああああ
ああアッアアアあああああああっあああああああああ
ああああああああああアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアあああああああっあああああああああああ
ああアッアアアあああああああっあああああああああ
あああああああああああっあああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ

あああ あああ あああ あああ
ア ア ア ア ア ア ア あ あ あ あ
!! !! !! !! 「」

あ
あ、

ソウカ、

俺は

いや、私は

否、我は

いや、わしは

ううん、ぼくは

———そうだったのか、

ソウカ イマ、ヤット 俺ハ 思イ出シタ。

俺は友を、家族を、先生を、先輩を、誰かも知らぬ男を、女を、老人を、子供を、幼児を、家畜を、動植物を、現象を、空間を、時間を、1つも欠片も微塵も何もかも残さず。

そう、自分ノ世界 ソノ存在ソノモノヲ 殺シタノカ。

s i d e o u t

F a l l i n g そして、すべてが始まる。～（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あゝ、なんか主人公重いです。自分で書いてても重くなります。でも彼にはいずれもう少し重石を背負ってもらう予定です。まだまだ先ですが……。

さて、今回の話でも結局名前が出てきませんでした。次回やっ
と主人公並びにヒロインの名前が明らかになります。

やっとなです。ええ、やっとなです。さっさとチート機能とか付けた
いなとか考えつつ……、それに関してはもう1イベント必要なの
と、まだ早いので保留という形です。

では更新情報、早ければ明日中には更新したいですが……俺の亀
執筆スピードでは無理だと思うので、来週中にはと言いたいです。が、
まだ来週にはテストが溜まりに溜まっているので来週の土曜日に更
新になるかもしれないです。

では、また次話お会いしましょう。

舞台裏（作者…主人公堕ちちゃったな。ま、次回でどうにかして
やるかな。

次回の舞台裏は主人公《名前あり》でもゲスト参加させよ
うかな、無・理・矢・理にでも）

A w a k e n i n g 再会

Side…神

「ウソだああああアああああああああアアアアアアア
アッアアアアア、ああああああああああアアあああ
あっあっあっあああっあっあっあっああああアアアアアア
アアアアアアああああああああアアアアアアアアアアア
アアアアアアあああああああああっあっあああっあ
ああッアッアアあああああああっあっあああああああ
ああああああああああアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアあああああああっあああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
ああアアアアアアアアあああああああ！！！！！！」

とうとう、その記憶を思い出してしまいましたか。この人には、
もう何も背負ってほしくなかったのに……。でも、それでも、こ
の人はこの世界にはどうしても必要な人。

それに、あの事実は例え最後に至った過程がどうであれ、あの人
があの人大事な世界を壊したことは事実ですし……。やはり蘇
生させるべきではなかったのかしら？ でも、彼意外には、アレは
殺せない。いや、実際にはアレそのものにホントに小さな傷を付け
たぐらいだった。でも、例えそれでも……。それは、たった一筋
の、希望の光なのだから……。

「

」

彼女の目の前でさっきまではしっかりとそこに立っていたこの男は、あまりのショックのためなのか崩れ落ちて、今は正座しているように立つ力さえなく、頭は上を向いて白目を？いている。この状態を他の者達は一切どう見るか。哀れと、そう嘆くのか？

少なくとも、男の目の前に立つ彼女は、違った感情を持っているようだった。

「まだ、意識は戻りませんか。」

彼のプロテクト解除をしてから、もうどれくらい経ったのかしら・・・。

1秒？1時間？、いや、もう1日たったかも、私の感覚的にはまだ1年は経っていないはずだけど。

——やっぱり記憶を戻すのは、まだ早かったのかな？

どうしよう、また『君』を殺しちゃったら、私・・・
絶対に耐えられない。

「

」

「どうしよ、私、あなたがいなくなったら、わたし・・・

ぐすっ・・・ううっ

ぐず、、、ううう

(ポンッ)

「——えっ?」

「まったく、泣くなよレイズ、目が覚めて一番最初に見た顔がそれだと、俺は悲しいぞ。」

「『君』!! えっと、その・・・記憶は!?」

「はぁ・・・なんとか、一部だけならな。」

side out

side・・・記憶喪失の男『君』だそうです。

記憶が戻ったのはいいけど、頭が痛いな・・・。

あれだけの情報量が頭の中に一気に流れ込んでくれば、当然といえば当然か……。なんたって人一人の一生分の記憶だからな。

さて……、

「よかった、よかったよ　　君　　！！」

そう言って、記憶の戻った俺の頭をしっかりとを抱きしめてくる目の前の彼女。

あれ？　レイズの最後の一言……。

たぶん俺の名前なんだろうけど……。よく聞き取れない。

「ん、あのさレイズ？　なんか最後の一文だけが聞き取れないんだけど……。」

「え？　……。あつ、そうか、そうだったんだっけ。

えっとね、『　君　』って言うのは、あなたの過去——うん前世の名前だよ。」

そう言いながら彼女は、抱きしめていた俺の頭を離して、座り込んでいる俺と視線が合うように目の前に座りなおしていた。

「まったく、俺には認識できないんだけど……。」

「あなたが前世の名前を知ることができないのは、そういう決まりごとだからね。神界の法で『現世で生きる人間は自らの前世の真名を呼ばれても認識することができない。』ということだから……。実を言うと、今のあなたは自分の真名すら持たない、ただの精神体なんだ。

でも、ホントによかった、必要なこととは言っても前世の記憶を思い出させちゃったら、ショックで精神が崩壊しちゃって、精神体が崩壊しちゃうかと思ったよ。」
また少し涙ぐみながら、彼女はそう告げた。

俺は、俺の知らぬ間にそんな危ない橋を渡ってたのか。なんというか、大胆だな。

だけど、その一か八かの賭けのおかげで、こうやって戻ってこれたんだから、よしとするか。

「ところで、なにその精神体って？」

「精神体って言うのは、文字通りなんだけど。

実は、あの戦いの後『君』の肉体は再生不可能なくらい崩壊していて蘇生することができなかったの。

だからどうにか精神だけサルベージして、なんとかこの神界につれてきたわけ。」

ホントに精神だけの存在ってことか、ってことは・・・

——やっぱり、か。

「あゝ、なるほど。

だから、前の俺が持っていたはずの魔力、気力：e t c. を、今はまったく感じられないのか。」

「うん。ちなみになんだけど、その前世にわたしがあげた魔力とかは、もう絶対に戻らないよ。（キッパリ）」

——え？

「え・・・？ そんな、なぜ？」

「私がなんとか、完全に消失する前にあなたの魂をサルベージしてくることはできたんだけど。その結果でなんとか今はあなたは精神だけの状態でなんとか存在を保ってる。けど、たぶんそう長くはもたない筈なの。だから、あなたの精神を入れ物になる新しい肉体を構築して、そこにああなたの精神を同調させて復活させるのは、神界でもう決定しているんだけど・・・。」

ああなたの精神体を構築している魂。それがすでにチート級の魔力とかを手にしたことを記憶しちゃってるから、同じ能力の譲渡はどうやってもできないの。」

そんな、それじゃあ俺はあいつに——アレに一体どうやって、どうやって戦っていけば・・・。

「それじゃ、どうやってアイツに勝てって言うんだよ！！」

「そのことにも、関係してくることなんだけど。」

それが・・・。うん、実はね・・・。ちよつと、私たちにも理解ができない事態が、あなたの魂に起こっちゃってて・・・。」

んっ？ 珍しくレイズが悩んでるというか、一応、神の1人であるレイズが理解できない自体って・・・一体俺の魂に何が起きてるんだ？

「魔力、気とかは、もう戻らないんだろ？」

それじゃ、俺の魂に一体何が起きてるんだ？」

「それは・・・、一応何が起きたか だけだね。私には何が起きたかは分かるんだけど、何でこういう事が起きたかが理解できないの。」

何が起きたのかわかってるのに、何で起こったのかわからない？
つまり、結果が分かっている過程が分からないってことか。

「とりあえず、何が俺の身に起きたかのか説明してくれるか？」

「んじゃ、なにが起きたかを説明するね」

まず、今『 君』の魔力、気：e t c. は肉体の消滅と

共に消えてしまったわけなんだけど、そのなくなっているはずの力と同等——ううん、それ以上の力がサルベージされた『

君』の魂に備わっているってことがわかったの。でも通常、力というのは肉体に備わるもの、それは例外はなかったはず。でも、『

君』には魂に力が備わっている。

そしてその力は、もはや魂と同化と言ってもいい位に一体化してしまってる、つまり、力はあるが今までに観測されることがない未知の力が『 君』の魂に新たに備わっていることが分かったの・・・。」

なんか、いろいろぶっ飛んでる話になってきたな。

それに未知の力だって？ それに神様ですら分からない力って一体・・・？

「・・・、その力って何か本当に分からないのか？

漠然としてもいいんだ・・・、なんか検討つかないのか？」

おそろくだが、魔力や気とかを失ってしまった今、これからはその『未知の力』と言われている力を、主軸として戦っていくしかないんだろう。

だったら、俺としてはやっぱりその力が一体なんなのかぐらいは少しでもいいから把握しておきたい。

自分から爆弾を抱え込むような真似はしたくないからな。

「・・・、えっとね。これはあくまで私個人的の憶測になってしま
うんだけど・・・、ひとつだけあるの。

魂と同化し、そして神ですら認識することができない力がひとつ
だけ。」

そうしてレイズは俺の目をまっすぐに見つめてくる。まるでこの先
を語るための許可を求めるみたいに。

もちろん、答えは決まってる。

「頼む、レイズ。」

うなずきながら、そう俺は答えた。

「えっとね、そのひとつの力っていうのは・・・

『神通力』

かつて、この神界・・・、神々の住まうこの世界を創造したと伝
えられている原始創造神と呼ばれるものが持っていたとされる力。

あらゆる物を創造し、あらゆる物を破壊する、万物の源。ばんぶつ みなもと

のありとあらゆる力に派生する原初の力であって、すべての力が到
達する終着点とも言われる。それが神通力。

別称・・・『世界の生命《ライフ》』

私も、とおい昔おじい様からたまたま聞かされたことがあるだけで、おとし話だと思っただけだ・・・

でも、私たちが理解できない力があるとすれば、これぐらいしかないの。(しゅん：)」

すごい一生懸命レイズが説明してくれている。

不謹慎だとは思ったのだが、その説明してくれている姿が相当可愛、あぁ頭撫でも

——つと、やばいやばい。思考を元に戻してつと

今まで聞いたことを要約すると、つまり

『俺は、魔力等を失った代わりに、神通力と呼ばれているおとし話レベルのよくわからない力と思わしきモノを手に入れた』と。

「うん、そうだね。簡単にまとめるちゃうとそうなるね。」

読心術か？

なんか今さらと言えば今さらのような気がするけど、こうして能力を見せつけられると改めて神様ってことを認識させられるよな。

なんか目の前で不機嫌な顔になってるし。あ、治った。

「それで、さっきの続きになるけど、話の流れでもしかしたら分かったかも知れないけど、神通力は今まで神界に属する神々が手にすることがないの・・・だから、神通力と言う言葉が残っていることと自体が不思議なくらいあいまいなものなの。

でも、伝説上には存在”した”・・・。ううん、”とされた”だね。その伝説は長い年月をかけて、今はおとし話や噂になった。

そこで、神界に伝わっている伝説なりおとぎ話、噂とかのいろんな話を、まとめて考えると、

神通力って言うのは”すべてのありとあらゆる力に派生する原初の力”・・・、つまり魔力や気へと派生することができると言うことになるの。

ということとは、それらの力の代わりを神通力で代用することができるって解釈できると思うの。

そして神通力っていうのは原始創造神の力、この神界をも創造した強大な力。これは憶測になっちゃうんだけど、きっと魔力や気の代用として神通力を使用した場合、発生した魔法や技の術式強度、術式による加護、術式構成、付加能力等は、どれを取っても一魔力や気と比べられないほど《・・・・・・・・・・・・・・・・》、強大な力になっていると思う。

——これまでのことを簡単にまとめちゃうとね、今までは魔力や気を媒介に魔法を使っていたんだけど、今はその魔力や気を失ってしまったから今まで通りの構成での魔法は使えなくなっちゃった。でもそのかわりに、神通力を媒介にして魔法を発動させることができるようになれば、同じ量の力を使った場合、きっと今まで以上に威力が出るはずだよ。

・・・でも今までと勝手は違うから、下手をすれば中級呪文・・・ううん、もしかしたら下級呪文すら使えないかも。あと、魔法の基本構成もだいぶ変わってくると思うから、既存の魔法の構成が分かっているとはいえ、戦闘で使えるようになるのはすごい時間がかかるかもね。」

「っ！、・・・そうか、今までは魔力で魔法を構成してたのに、今度は神通力を使って魔法を構成していかなきゃいけなくなったから、今までどおりの魔法の構成では使えなくなるかも、しれないのか・・・。」

「魔法だけじゃなくて、気を使う技も一から構成し直さなきゃね、でも気を使う技の方が構成の変換は簡単かもね。」

でも結局のところ実質レベル1からやり直し、ってことだね。」

なっ、なんだって・・・。

記憶が戻った今なら分かる、あの絶望するほど壮絶なまでに長かった修行時間はすべて無駄となったってことなのか？

ああ、なぜか走馬灯のように、あのひたすらに長かった修行期間が、見える。

「あっ、あの前回の膨大な修行期間は一体・・・、何だったんだ？

orz」

「でっ、でもあれはあれで前世で役に立ったんだから、それはそれでよしにしようよ。それに、あれだけやったっていう経験値は記憶に残ってるんだし、ある意味結果オーライという形で・・・、ね？」

あたふたしながら、目の前でレイズがフォローしている。

レイズが、とてもやさしい・・・、記憶によれば今までも毎回毎回やさしいよな、ほんと涙が出そうになる。

確かにレイズの言う通り、記憶と共にアレだけやったっていう経験値は今の俺の体フィードバックされているんだ。だったら、その経験を使えば、神通力を使った構成を考えるのに役に立つかもしれない

ないな。

「はぁ・・・、もう悔やんでもしょうがないか・・・。」

一応戦うための力は手に入った。おとぎ話級というのが少々心配ではあるけど・・・。

そうになると、さっそく神通力を試してみたくなってくるな。本当に伝説級の力とやらなのかも気になるし。

・・・って、あれ？　そういえば・・・。

なんか突拍子もないことが立て続けに起こってたから、一番大切なことを忘れてた。

「ところで、俺はこれからどうすればいいの？　特にさ、ほら名前とか。」

「とりあえず名前はね、一応神界の決まりとしては、前世の名前と同じにならなければ何でもいいよ。」

「とは言っても、前世の名前はわからないからな・・・。
そうだな・・・それじゃ、これからは”黒羽悠夜”って名乗ろうかな。」

「んじゃ『悠夜君』だね。」

それでこれからのことなんだけど・・・、まずは能力の譲渡だね。一応転生者の決まり事として能力はあげられるんだけど・・・」

ああ、転生者恒例のあれか・・・。前世で顔合わせたことのある転生者もみんなもらってたし、実際俺も貰っていたしな。たしか、

過去の俺は・・・『身体能力の向上』、『魔力、気のEXクラス化』と、あとは『妖精眼』^{グラム・サイト}とかも貰ってたな。

一番のお気に入りと言えば、やっぱり妖精眼か、懐かしいよな。あれのおかげで、かなりやばかった局面時とかも潜り抜けて来れたし・・・でも、あの目立つ紅い瞳の所為で恥ずかしい二つ名まで付けられたし、どっこいどっこいだな。

っと、話を進ませないと

「そういえば、そんな決まりもあつたな。できれば前と同じ能力がいいんだけど」
「ああ!! でもね・・・あのく・・・その、ね。」

ん、何だ?、なんか引かかる言い方だよな。
一体なんだ?

「あのね、悠夜君は今までこの世界の歴史上で1人も存在しなかった、『神が一度能力を与えて、なおかつその状態で死、ううん存在が消滅し、さらにまた転生する者』だから、実はいろいろな規則、制約が厳しくて・・・あと、未知の力なんてイレギュラー性高いものを有している者に、神が与える能力を受け入れる容量があるかどうかも分からなかったの。」

だからね、能力が1つしかあげられないの・・・本当にごめんね、一応上のおじいさん達には何度も掛け合ってみただけど、どうやってもやっぱりだめって言われて・・・。」

ああ、なんかいじけちゃった・・・。

俺が寝ている間に、そこまで頑張ってくれてくれていたんだな。やっぱり久しぶりに会ったけどレイズはレイズだな。

「いや、もらえるだけ、まだマシだよな。

さて、何にしようかな？ それって、前にもらった能力でも大丈夫なのか？」

「ええっと、能力を与えるという性質上、能力を転生者の魂に直接刻むの。そして悠夜君は、過去に能力をもらった。ということ、同じ能力を魂に刻もうとすると、どうしてもが持つことを魂は拒むの。だから同じ能力は実質あげられないんだ。」

「そうか、それじゃしかたないか。」

さて、それじゃどうしようか……。前回貰ってないで、新しく貰ってアイツに対抗するために必要な力。

それじゃ――、

「――《加速》の力。……そう加速する力が欲しい。」

「《加速》の力ね……。」

うん、今能力の譲渡が終わったよ。」

「そう、やっぱりまた実感は湧かないな。

やっぱり、魔力がないっていうのは心細いよな。」

と言いながら、悠夜は手をグー、パーと繰り返ししてみる。

それもしかたがないだろう、いくらアレに傷を付けることができたとは言え、あの時がLV・100だったとすると、今はLV・0に等しいぐらい。そして対抗するために持っている力と言え、《加速》の力。そして御伽噺で語られ、その存在さえあやふやな《力》だけのだから。

「大丈夫、また前みたいにくさん修行すればいいんだから、ね。

——それじゃ、悠夜君に能力も与えたし、記憶も戻したし、この後はもちろん恒例の……。」

あ？　なんだ、この背筋がゾツとするような、背中の汗がとんでもないことに！　いや、そんなことよりも、あのレイズの顔！？

ものすごいうれしそうな屈託のない十人中十人が振り向きそうな笑顔。　なんだ？　なにかまだ大切なことを忘れている、そうだ！！

まだなにか忘れているはずだ！！　なんだ？　なにを忘れている！？　なにか起こる前に対処しないと……、ってあれ？　前にもこんなことがあったような、なかったような、いや！　あった、あったぞ……あれはいつだ？　そして何があった？　なんで俺はこんな無意識にレイズに対して恐怖しているんだ？　なにが、そう何があった過去の俺！頼む教えてくr

……ん？レイズの指が何か押そうとするみたいに人差し指だけ伸ばしていr、——そうか、思い出した、そういえば、レイズって確か！！

「いつてらっしゃーい！！！」

そうだった、レイズは……そう、レイズはものすごいテンプレ好きなんだっけ……。と、今さらながらに思い出しながら、前回もそうだったように俺は足元に開いた暗い穴に落ちて行った。

「レイズウウウウウウウウウウ！！！！！！、またやりやがったなあ
ああああああああああ！！！！！！」

S
i
d
e

o
u
t

A w a k e n i n g 再会~（後書き）

お久しぶりです。活動報告に載せときながらも更新しなかった作者です。

活動報告した、その次の日に風邪を引きまして、そして廻りに廻って今日更新しました。大変申し訳ないです。

さてさて、いよいよ主人公の名前が決定しましたね。それに記憶も元通り・・・とは行きませんでした、ほとんど思い出しました。まあ、思い出していないのは極々1割程度なんで、そんなんでもないんですが。

（どおおおおん！！）

おっと、今日の下種ト、っと失礼。ゲストのこの作品の主人公である黒羽悠夜君です！！

（わーわー）↑カラオケとかでよくある合いの手の音。

「つてゝゝ、つてなんだここ？

あ、サボリ魔と書いて作者だ。」

失礼なヤツだな、ホント。

：まあいいや、さてこの後書きスペースでは、作者とこの小説のキヤラたちが普通に会談をする、というよくある形をとりたいと考えてます。用は作者のやる気しだいと言うことで。

それにしても”黒羽悠夜”・・・いかにも厨二病である作者が考え

付きそうな痛い名前だなゝww

「それをお前が言うのか、なんか俺だったまたま思いついた名前だったんだよ!!」

ふう〜ん。実際この名前にはあんまし意味ないけどね。ほんと適当につけた名前だったし、なんか気に入ったからそのまま本編でも使ったという感じだったし。

「俺って、そんな存在だったのか？orz」

ま、そんな感じなのだよ。いま一応名前に関しても意味を付けたりうか考え中だけど・・・。それも作者のやる気しだいと言う感じで。もう名前決まってるのに後付で意味を付けるのは正直大変だし・・・。

「頼むから、もっとキャラに愛情注いでくれよ、作者。」

ゴメン、無理それ。

特に今は、お前専用の武器の製作に非常に手間取ってるんだから、この作品に関しては執筆とその武器の設定以外にはあまり時間が費やせないの、ok？

「ま、ちゃんと書いてくれるなら、いいや。」

《中略》

では、とりあえず今のところの武器の設定はこんな感じで言うことを悠夜に伝えたので。今回の後書きは、これにて終了。

さてさて、では次回は落とされた悠夜の続きではなく、レイズルー
トを勧めようかと。一応プロットは終わっているので明日には更新
できるかと・・・。

では、感想、誤字脱字報告、質問等もしっかりちゃっかり受け付け
てますので、ぜひお願いします。「お願いしまーす。」

では、また次回、お会いいたしましょうノシ

「俺とは次々回になるだ r (シヤツ) ↑足元のシヤッターの開く音

またまた、やりやがったなあああああ！作者あああああああ
あ！！！」

Trouble ~ 其れは突然に ~

Side レイズ

「レイズウウウウウウウウ!!!!!!、またやりやがったなあ
ああああああああああ!!!!」

その言い方じゃあ、なんか悪者みたいだよ、悠夜君……。それに
”また” って今さら過ぎるよ♪

「ふう……。でも：やっぱりごめんね、悠夜。」

——まさか、またあなたを戦わせることになるなんて、いくら
あの人達の指示でもやっぱり……。

ううん。でも、もうあなたにしかアレは倒せない、そこまでのモノに”アレ”は、もう成ってしまったから……。

白い。そう、白く何もない部屋の中で私はそんなことを思っていた。
あの人を送り出した穴は、もう閉じている。

此処にはもう私1人しかない。あの戦いの後以来、私はいつも1人だった、それまではすぐ隣に彼——今は悠夜という名前になっていたけど、その彼がいつも隣にいてくれた。だから、安心できていた。それは、きっと、これからも感じれるだろうけど……。でも、やっぱり今はさびしい、そう自然に思ってしまう。まるでこの何もない部屋のように。

さて、悠夜を送り出したことだし、私も早速悠夜の元に向かわないと。まだ現状の整理とか、修行内容とか、説明しなきゃいけないことが山ほどあるわけだし。

R i R i, R i R i R i, R i R i, R i R i R i. . .

「ん？なに、直通秘匿回線？一体誰から．．

え？おじいさん達！？　．．．一体、この私に何の用なの？」

どうしてだろう．．．。なぜか私にとって久々に”嫌な予感”がする。

とにかく、早くつなげないと。

私の目の前にとある会議場の様子が映し出された。席は7つ。顔を見なくとも、たとえ画面を通じて間接的に見ただけでも、それぞれから発せられている”圧力”で気がイってしまいそうな、そんな方々がそろっている。

その方々は本来なら私のような中流以下の神などが、たとえば一生をかけても直接顔を合わせることどころか、間接的に声を聞くことすらできないような顔ぶれがそろっている。この会議室にいる方々は最高神——この神界、いや、この世界すべてを管理している神々なのだから。

通信がつながり、会議室にいた最高神様達のお顔が、それぞれ別の小枠のウィンドウで見ることができた、しかし一様にその顔は厳しい、一体？

「お待たせしました、レイズです。最高神の方々お疲れ様です。

『。』

「今からそちらにですか？ お言葉ですが私のようなものが・・・

『、？』

えっ？彼・・・、ああ悠夜ですか？もう受肉させ現世に送りましたが、彼が何か？」

『。、。』

「・・・分かりました。ではすぐに、そちらに向かいます。」

——これはもしかしたら、まずい事になったかも知れない・・・。
まさか”アレ”がこんなに早くに目覚め、行動し始めるなんて、
あの戦いの時のダメージはもう回復しきったって事？それとも、も
う”食事”が終わったとか？そんな、いくら疲弊した■■でも同質
量の存在を喰うにはもっと時間が掛かる筈・・・。
まさか”アレ”はこちらの目的を？ううん、それはありえない。
なら、一体？

ダメ、今は情報が足りなさ過ぎる。それに今は早くお話を聞きに行かないと。

っと、その前に

「走り書きになっちゃったけど、このメモを悠夜の着く予定のマン

シヨンに・・・

《転送》！！
」

——ごめんね悠夜。そっちに行くの少し遅れるかも……。お願いだからあの写真達には私が行くまでは絶対に触れないでね……。

S
i
d
e

o
u
t

Trouble ~ 其れは突然に ~ (後書き)

さて、時系列的には3話目のちよい後の話です。実質3・2話位ですかね。

そして、今回はゲスト予定だったレイズさんは、ちょっとお偉いさんの話を聞きに行っているのでパスという形になりました。レイズに代わってお詫びいたします。

とりあえずこの後の話は次回の4話では明らかにしません。もうちょい先の本編内で語られることになるだろうと思います。

では、次回5話の更新予定ですが、今日(2011/8/27)の夜辺りを予定してます。では。

T r a v e l a r ~ 序章ノ終幕~ (前書き)

大変遅くなりました。

兎にも角にも、これでThe 0 chapterは終了。次話から本編の開始となります。

いろいろ、分かりにくい箇所があるとは思いますが楽しんでいただけると光栄です。

Traveler~序章ノ終幕~

ドンツッ!!

「痛って」

・・・って、ここは一体どこだ？　なんか見た感じ、ごくごく普通のリビングっぽいな。」

悠夜がレイズに送られた（一方的にだが）場所は、悠夜自身も言っていたがごく普通のマンションのリビング。だがしかし、あまりにも生活感がなさ過ぎる。床には傷一つないことから始まり、床、家具に埃が一切ない、さらに極めつけとして家具系統にまるで使われた痕跡——この場合は生活感と言う言葉がぴったりなのだろうが、それらがまるでないのである。

まるで、この日のためにわざわざ創られたような、そんな雰囲気漂うリビングであった。

「いや考えてみれば、この普通さが逆に不気味なくらいだ。

レイズのことだ、実はこの部屋は実は箱みtainな構造で、この周りは砂漠とか。

・・・十分にありえる。」

『どこぞの皇帝がとある教団滅ぼした時じゃあるまいし、そんな

ことはさすがに考えてません』b y, 作者

ふと、悠夜は周りを見渡した、しかし部屋の中にあるのは、テーブル、ソファ：etc. と普通の生活を送るのに最低限必要なものばかりである。若干カーペット、ソファ、テーブルクロスなどの色がパステル色なのはおそらく、この家具を選んだであろう彼女の趣味といったところか。

しかし、それを含めたとしても、あまりにも殺風景過ぎる景色。ふと、また同じように悠夜は周りを見渡した、するとテーブルの上にさきほど見た時にはなかったメモがあることに気がついた。

「ん？メモか、なにになに・・・。」

『現状報告（よく読んどくように！！）』

ここは、悠夜君がいた世界のとあるマンションで、送った時間はXdayからちょうど7年前で悠夜君の肉体は中学1年（13歳程度）^{あの日}にしておきました。一応このマンションがこれからの拠点となります。

私は悠夜君を送った後に、少し最高神のほうからお呼ばれしちゃったので、到着が少し遅れます。勝手に部屋とか覗かないようにしてね。

レイズ・A・V・E・ネフィリーゼ』

「・・・なんか、レイズにしては珍しく走り書きのメモだな。

しかし中学生の肉体に、あの日のちょうど7年前か・・・。」

記憶のプロテクトを外したとはいっても、実を言えばまだ思い出せないことも少しばかりは在る。例にあげれば最終決戦のあの時、一体どのような終わり方をしたのか。さらに、それらに関することもし少し欠落していたり。

さらに、戦闘経験はある程度戻りつつあるが、おそらくこの体ではまだその経験が生かせない　という点からまだまだ気が抜けない。

それが今の悠夜の正直な考えである。

「――それで『少し遅れる』　つか、それじゃ待つとするかな。

まずはじめに――――」

「……。貰った力が《加速》か。

今さらといえど今さらだけど、やっぱり悔しかったんだな。俺は」

悠夜は先ほど神界の方で貰った力についての復習を最初にするらしい。

今現在、この力しかないと言えど、確かにそうなのだが。第三者の他人から見れば『何かに追われるように、ひどく生き急いだ子供に見えることだろう。』

実際は悠夜自身、ふと何気なく能力についての確認をただけなのだろうが。

はっきり言えば、その思考回路はすでに、一般人ではなく戦士たる者の思考なのだろう。

（あいつ——レイズから貰い受けた《加速》の力は大きく分けて2つ。）

（《内面的加速》と《外面的加速》）

（《内面的加速》は精神、簡単に言ってみれば思考の加速。一応、常時発動型とはいっても段階^{ギア}をあげて思考の加速を引き上げることが可能。

しかし、慣れてもないのにギアを上げすぎれば、脳内^{ソフト}での処理に脳自体^{ハード}が耐え切れなくなつて……。バーン、か）

（もうひとつ、《外面的加速》の方は肉体にブーストをかけて加速

させる。こちらは常時ではなく任意の発動という形を取っている。
言ってることは簡単だけど、ある程度肉体が丈夫でないと発動後
少しでも動かせば、筋断裂、骨折、内臓の損傷等を引き起こして一
般的な生活、ましてや戦闘を行えるようなカラダではなくなってい
まう。）

「受け取ってからこう言うのもイヤだが・・・
いくらなんでもピーキー過ぎる。使う場面を間違えれば、自殺
をするよなもの、か」

「でも、思い出せない時もあるけど、あの時、あの場所、いろんな
場面で、あともう一步、あともう1秒欲しかった場面が多かった。
だから、この能力にしたんだよな、俺は・・・」

その声は、独りしかいないこの淋しいリビングにそれこそ虚しく、
響いた。

[illegible]

「遅い、いくらなんでも遅すぎる。」

悠夜がレイズのことを待ち始めて、かれこれ1時間。女の子に待たされてるんだからいいじゃないk：ゲフンゲフン、失礼。

先ほど生活に必要なものはあると言ったものの、実はこの部屋テレビもラジオもない。したがって悠夜はこの約1時間、先の能力の確認や思い出した記憶に関しての整理をしていたのだが、それでも1時間もたせるのが精一杯だったようだ。

そうなってくると、次に起こす行動というのは・・・、

「やっぱり、これからの拠点になるんならレイズには悪いけど、とりあえず全部の部屋でも見とくべきだよな。」

S i d e 悠夜

ここはどうやらリビングらしいし、すぐそばにキッチンも見える。前の俺がよく目にしていたような普通のマンションだな。

それに、どうやら目の前にあるドアから廊下に出れそうだし・・・

。

「普通の廊下だよな・・・あのレイズの事だから黒板消しトラップとか、油塗ったくって滑る廊下を仕込むようなマネとかしそう。いやさすがにねえよ？」

なんで疑問系になっているのかは、さておき。どうやら思い出した記憶の中には、嫌な記憶も当然あったようだ。

（さて、廊下にでたらまず左側にドアがあったし、開けるか。）

「二つ目のドア・・・これはスライド式か、なら警戒しなくてもいいか。」

これは、洗面台か。その向こうには・・・浴室だな。」

その反対側にもドアがあり、今度は恐る恐る手を伸ばして何度も引手を確認して、まるで全身の勇気を奮い立たせるように勢いよくドアを開いた。

「二つ目、トラップは・・・ない。なんの変哲もないトイレ？
なんの変哲もないトイレだ」

廊下に戻って、その先には2つ、向かい合わせでドアがあつて、その先に玄関があつた。

とりあえず、また、恐る恐る手を伸ばして何度も引手を確認s（r
y 左側のドアを開けるとそこには、大きなベットが一つあるだけ。

そう、ベットが一つあるだけで。

「一つ目の部屋か、・・・なんの変哲もないベットがあるのはいいんだが、なぜ1つ？そしてキングサイズ??、これはツツコンで欲しいのか？そうなのか？」

（そんなことは、どっかに置いとこう。うん置いとくべきだ。きつとツツコンじゃいけないトコだったんだ、そうにちがいない。じゃなくて、そうであって欲しい。

一応記憶が正しければ俺とレイズはそんな関係じゃなかったんだし・・・。）

さすがに、一緒に寝るなんて事はない。そうだ。絶対にそうに違いない。そうだな、『男はソファにでも寝ろ』ということだろう。

そうであって、ほしい。

なにかに打ちひしがれながら、目の前の現実からそっと眼を瞑るように、そっとドアを閉め反対のドアを開けると、そこは、さまざまな写真だけが壁に飾られている、奇妙な部屋であった。

「ここが最後のドアで最後の部屋か・・・。

これは、絵？いや、写真か。壁一面に写真がたくさん飾ってあるんだな・・・。

でもレイズに写真の趣味なんてあったっけ？」

そんな趣味は確かなかったはずだと思い出しつつ、それではこの写真は何なのか後で本人に聞いてみようと考えながらゆっくりそれらの写真を観回っていると、俺はその飾ってあった写真の中の一枚に、いつのまにか惹きつけられたのか、よくは分からないが目を離せないでいた。

その写真は人は誰も写ってはいないけど、その代わりにとてもきれいな桜が咲き誇り、地面には芝が生えている、所々クレーターや焼け焦げているところがあるのだが・・・。

しかし、なぜかこの意味も分からないような写真に俺は惹きつけられたのである。

しかし後から考えれば、部屋の散策なんて彼女のメモに書いてあったようにやめておけばよかったのである。この部屋を用意したレイズが着いてからでも許可を得て散策すればよかったと、のちのち後悔することになるのだが、それはもう少し後のお話で。

しかし最悪でも、まだこの時点でちゃんとあのメモの注意を思い出していれば・・・

「ん？なんだ、この写真？・・・桜林か、きれいだな。

ってか、なぜかところどころクレーターができてたり焼け焦げてるけど・・・WWW」

でも、なぜだろう？

俺はこの場所を知っているような気がする。

いや、知っているどころか行った事があるし、見たこともある。そしてこの場所には何かが、そう何かが足りない。とても大切なも

のだった気がする、いや大切なものだった、その何かが思い出せない。

必死に思い出そうとしていると、なにかにでも通じたのだろうか。引っかかりが取れるように微かにだが思い出し始めることができた。

（そうだ、誰か達とこの場所で笑いあった）

（その誰か達と一緒に、たくさん苦しいことを経験したし、同じだけ楽しいことも共有した。）

（そう、その子の名前は・・・）

「そう、たしか」

”。

” S ケ テ ・ ・ ・ ”

「確か、そんな名前だったよな・・・。って、ん？、今なにか聞こえたような。」

” ワ タ シ タ チ ヲ ・ ・ ・ タ ス ケ テ ・ ・ ・ ”

『 君 ”

「今度はちゃんと聞こえた！」

『たすけて』って……。」

すると、今まで眺めていた写真が急に眼も眩むような光で輝き出した。

しかし悠夜はなぜか、その眼も眩むような光の中でもまったく、眼を閉じれないでいた。

第三者がいれば分かったかもしれないが、そのときの悠夜の眼は逆にその光の向こうを見ようとするように、眼の瞳孔が開き始めたのである。

「今度は写真が、光った……！」

——っ体も動かな、い。まずい、なんだ？なにがおk……。」

一瞬だけ今まで光っていた光がかわいく見えるような、もの凄いが瞬いて。

その光がやんだ時、その写真の前には誰もいなかった。

燃え尽きる一歩手前の炎のような、儚げない紅い光が、一瞬残るばかりで。

S i d e o u t

side..レイズ

視点は移ったが、ここは同じマンションの一室。

それも、つい先ほどまで悠夜が暇をしていたリビングに、突然まるで人形のようなきれいな少女が降って来たのである、しかもちやうど悠夜がだらけていたところに寸分狂わず。

もしも、まだこの場に悠夜がいれば上から踏まれるような場面があったかもしれないが、どうやらそのような場面は見れなかったようである。

残念。

「ふー、やっとおじいさん達の長話がやっとな終わった・・・。いくら何でも長すぎるよ・・・もう送り出してから1時間過ぎちゃってるし。」

さて、ただいまー！ あれ？ 悠夜君ー！！ユ・ウ・ヤーー？？」

あれ？何処行っただろ？まさか、かくれんぼとか？
ううん、悠夜はそんなことをするような人じゃないし……。

（　　！！　　）

うう、嫌な予感が……、このタイミングでってことは、まさか！？

「……この周辺の生体波動を探っても、悠夜がヒットしない。つて事は、つまり悠夜はこの近くに存在していない。」

（ボタンッ！！）

急いでリビングを出て、玄関のドアを確認するが鍵は掛かったまま。

と言う事は、おそらくこの場に送られたであろう彼女のパートナ―は外には出ていないことが分かる。

「ドアロックがそのままだから、この家から出てはいない、このことから考えられることと言ったら……」

まさか！　メモで注意したのに、あの部屋に入っちゃったの！？

（まずい、あの部屋は……、あの部屋だけは、まだまずい……）
（それに、最高神のおじいさん達から、”アレ”がこんなに早く動き出してしまったことが分かってしまった今、あの部屋に入るのだけは絶対にダメ……、今の悠夜の状態じゃ私と一緒にでもまずいの

に、それが1人でなんて・・・)

(お願い、再会したばかりなのに・・・、お別れは、イヤだよ。

『■■■■■■■■■■』！！！)

(ガチャ！！！)

そう考えながら、レイズが急いで悠夜が最後に開けたドアを開くとそこには・・・

「悠夜！！

やっぱりいない・・・でも、そしたらいい・・・どこかの世界に飛んじやったの？」

レイズがその部屋に飾られている写真一つ一つを確認していると、ちょうど悠夜が見ていた写真だけが悠夜が見ていた時と明らかに変化していた。

悠夜が綺麗だと言っていた桜林が枯れて、まるで山火事のように燃えていた。

「つつっ！！、これは・・・、桜林が枯れて燃えている。

それじゃ、まさかもう————ううん、微かにまだ枯れていない枝がある！！」

という事は、まだどうにか間に合う！

「急がないと。本当に手遅れになる前に！」

そう、この世界の人たち——あの子達の、笑顔を守るためにも……！！！！」

そう彼女が大きな声で言うと、またこの部屋を眼がくらむような光が包んだ。

そして、またしても光が収まった時、そこにはレイズがいなくなっていた。

S i d e o u t

そして、彼女が見た燃え盛っていた桜の木の写真は……、なぜか全面真っ白になっていた。

それが一体何を意味して、何につながっていくのか。このことを知りうるものは、まだ少ない。

Traveler～序章ノ終幕～（後書き）

どうも、予告した割にだいぶ遅刻しました。申し訳ないです。

さて、では本日のゲストを呼びましょうか。

レイズ・A・V・E・ネフィリーゼさんです！！

レ「どうも、レイズ・A・V・E・ネフィリーゼです。

長いのでレイズで結構ですよ。（ニコッ）」

あっ、ご丁寧にどうも。

早速ですが、ずいぶんと急な展開でしたかね〜？

レ「そんなことはないと思いますけど・・・

と言うよりも、作者さんが早く投稿してればよかったんですよ

！！（プンッ）」

それは申し訳ないというか・・・。

でも大変だったんですよ、これでも・・・

レ「作者さんって、なにかやってましたっけ？」

ギャルゲを・・・4作品ぐらい

レ「バイトでも、勉強でもないじゃないですか！！

なら、さっさと投稿してください！！」

だが、断る。

今はHHGを進めてる最中なので、次回も遅れる可能S「それでも

書いてください。」

・・・。

レ「そこまで、考えることですか!?

あと少しで、夏の長期休暇終わりですよね!

ただでさえ書かない人なのに、大学始まったらどうするつもりですか!?

大丈夫、そのときはなんとかなる。

レ「その根拠は一体どこから・・・」

まあ、一番厄介な悠夜専用装備の設定がほとんど片付いたし。

だからその所為でチャプターをまるまる一つ、その装備の入手に使うことになるんだけどね。

レ「そこまで考えてるなら、まあいいですけど・・・」

ま、悠夜が頑張るためにレイズにはまだまだ頑張ってもらわないと、いざとなったら同じベットで寝てにゃんにゃんして回復させるつもりなんだろう?

レ「(ボフィンっ!!)」

そんなに、ことはありまふえん!!」

初々しいね」。

(ま、かなわないことなんだろうけど、さ)

レ「?..?..?」

とりあえず、さっさと行かないと。
悠夜のやつ、かなりピンチなことになってるからさ

レ「そうでした！

では失礼します!!」

(´Д｀)ノシ

それでは、皆様。

これにて『The 0 chapter.. Second Pro
logue』は終了です。

これから続く本編をお楽しみに！

感想、質問の方はバシバシ受け付けてます。

では、The 1 chapterの1話でお会いいたしましょう。

ep.:1 魔法の呪文はリリカルなの？ 前編（前書き）

やっと完成。ちなみに前後編です。

続きは後書きの方に書きますが・・・『残酷描写』注意です。

ep:1 魔法の呪文はリリカルなの？ 前編

Side 悠夜

また、この真っ暗な空間か・・・。

しかしここは、一体どこなんだ？

でも前回と比べて、この空間に変化がある。それは、一瞬だけとんでもない時間が流れた気がした。だけど、それ以来俺の周りの時間は止まっているままだであること。そして俺の周りに空間の流れが常流れていること。

それにしても、さっきからこの空間の流れ方が酷い。まるで空間がねじれていて、そこに無理やり頭から押し込まれて、次は足を引っ張られて、そしてまた頭から押し込まれたり。

しかしそれでも、前に進んでいるという感覚はある。

そういえば俺の、俺の名前は？

俺の名は・・・。そうだ、俺の名前は今は『黒羽悠夜』だ。

と、言う事は今回は記憶はなくなっていない。なら、これは人魂のサルベージではない

・・・なら、前のレイズの使ったものとは違う。

なら、一体なにが起きた？

思い出せるとしたら

——確か部屋に入って、写真が光って、体が動かなくなって、
そしたら真っ暗な空間の中・・・。

記憶があっても、これせは役に立たないか。

っ!?

まぶしい、オレンジ色の光?・・・それに心なしか暖かい。

これは、地表にいる時に感じられる太陽の光に似てる、そんな暖かい光。

こういう暖かい光には攻撃とか、そのような負の感情は込められていないはずだったんだけど。でもそれでも用心はしとかなないとダメか。

本心言えば、まだろくに戦えもしないから危ない橋は渡りたくはないんだが、今この瞬間にも徐々に目の前の光は大きくなっていく。これはもうホントに覚悟するしかないな。

あちら側にたどり着いたときに鬼が出るか、蛇が出るか。

今は、ただ俺には祈りながら流れに身を任せることしかできない。

S
i
d
e

o
u
t



この世界に、燦々と太陽は輝く。

まるで、この世界に結果的には送り込まれることになってしまった異端者である彼さえも、暖かく包むように。その光はただただすべての人に平等に暖かく降り注いでいた。そう、すべてが平等に。

しかし、この世界には招かれざる者達が——世界から考えてみれば、異物と同義な”者”達が紛れ込んでしまった。それは、黒羽悠夜と名乗ることを決めた彼とて同じ。

この世界の盤上の駒は、今揃えられようとしている。それは、この世界の意思と呼ばれるモノを無視して。

これより語られる物語は、その暖かな太陽が照らす世界に生を受けた、1人の少女と、その大事な友達、大切な仲間達と、そう遠くない未来に《星帝》と呼ばれ語り続けられることになる男の出会い、そして別れまでの物語である。

The 1 chapter.. Magical Girl Lyrical Nanoha



「やっと着いたか。でも、ここは一体どこだ？

見た感じは林？いや、向こうに神社が見えるけど……。」

なんか転生して早速マズイ感じだな……。こんなことなら、レ

イズの手紙の通りに何にも触らず、のんびりと到着を待ってた方がよかったな。

何にしても、もう後の祭りだけど……。

状況的には、かなりまずい雰囲気だよな。こっちは武器なし、能力も試してない。ましてやここが一体、いつのどこかすら分からない。もしもこんな状態でアイツ等と戦闘にでもなったら……、

イヤ、考えるのはよそう。今、何か考えてもまったく希望が見えない。

「はぁ……、これから一体どうしようかな。」

とりあえず、太陽を見た感じ、ほぼ真上……少し西に傾いてるみたいだから2〜3時くらいであることはわかった。

少し早いけど、今夜の寝床でも考えるかな。

って、そういえば……、荷物が無い状態ってことは……。↓財布もない。↓食料を調達できない。↓ヘタすりゃ餓死。

「絶望した……。こんな状況すべてに、そして自分の軽率な行動に絶望した。」

周りから見れば林の中で突然『orz』なポーズをとる少年がいて、大人ならば不審者と見間違われるような状況である。

「さてと、とりあえずこんな神社にいても仕方ないし、町の方に行ってみよ」

そんな感じで、俺こと黒羽悠夜が一步踏み出した時だった。その得体の知れない、まるで周りの空間と隔絶されてしまったよ

うな感覚が俺に走ったのは

（ゾクリっ!!）

（なんだ!? これじゃまるで———結界か!!）

「キャーーーーー!!!!」

「くそっ! こっちは何も力が使えないってのに……、あっちか!」

そして、俺は神社の方に走り出した。

そこで俺は……一方的にはあるが、彼女との再会を果たすことになる。しかし、彼女と初めて話すことになるのは、この事件から少したった後になるってしまいうのだが。



Unknown Side..

「はぁ、はぁ……」

急がないと、早くしないと———。

私が、このお手伝いをする事になったのは今回で2回目。1回目は偶然だった、とても怖い思いをした。でも、私はこの子の役に立ちたい！！

長い階段を駆け上り、そこにいたのは、倒れている女性と――黒くて、4本足、犬と言えれば見えないことはない。でも根本的に彼女達の知っている犬とは違っている”アレ”

「あれは一体、なんなの！？」

「あれは、原住生物を取り込んでる。マズイ、実体がある分この前のよりも手強くなってる。」

「大丈夫、たぶん。」

「■■■■！、■■■■■■■■■■の起動を！！」

「うん！」

私は、闘う。この子を助けるために。

S i d e o u t

S i d e 悠夜

俺は、今、言葉が出ない。

今、目の前で起こっている光景が原因ではあるが、”その光景が”ではない。そこにいる人物、そう――彼女を見て、俺は言葉を失っている。

茂みに隠れながら、俺は目の前で行われている戦闘をみて絶句している。

「おい、おい……。マジかよ。よりもよって、また最初は此処か。」

なにを言ったって、しょうがない。

目の前にいるのは、”白いヒラヒラした服”を着た”小学生にしか見えない”少女、その手にはまるで玩具屋にそのまま売っていそうな”魔法使いが使うような杖”——若干、子供っぽく見えてしまうような杖なので、魔女っ子と言ったほうが正しいだろう。少女は茶色い髪を、白いリボンでツインテールにしている。

こんな、格好をしている少女なんて、俺の戻った記憶の中にはたった一人しかいない。

それは……、

「この世界は”魔法少女リリカルなのは”の世界なのか。」

俺はどうやら、この世界とは因縁が深そうだな。前の俺が一番最初に来たのも、この世界だったし。

でも、どうやら時間はずれてるみたいだ。前はたしか……、もっと前で、動物病院の話から戦闘に参加できたし。今回は、前よりもだいぶ遅い。

たぶん、いや。絶対レイズがないからだ。あいつは一応ナビゲータ（飛ばす時に、時間と場所を設定して飛ばしてくれる役目）だったし、あらゆる世界での、原作の道筋を知っていた……ただのサブカルチャーオタクなだけだったが。

「どうするかな、なんか戦闘終わりそうな雰囲気だし。」

——レイジングハートお願いね。

——ALL right. Sealing mode. Set up.

——リリカル、マジカル。ジュエルシード シリアルナンバーX^じ
ゆうろく
VI!

封印!

「終わったし・・・、まあ雑魚だからな。まだ死神^{フエイト}さんも出てこないし」

でも、どうしようかな。ここがリリなの世界、しかもまだ無印^{1期}であることぐらいしか今は分らないし。それに・・・

「世界がどこかわかって、文無しじゃな・・・。」

いっそのこと、なのはに頼むか「泊めてください」って・・・。

——それにしても、おなか減ったね。『君』帰ろっか。

いや、あの親バカとシスコンがウザったらしいだけか・・・。
どうしよう・・・。

って!!、いないし・・・。
本格的にどうしよう。

前の俺が負け、俺の世界が消滅——否、喰った存在。

焦りと、怒りと、歓喜で心がぐちゃ混ぜになりながら、神社の方を振り返った。

そこには……

「BAG!!」

まるで、肉片が人を模ったようなモノがいた。——そう、肉片という言葉が一番似合うような、一般人が見れば卒倒しそうな存在がそこにいた。

「くそっ、こっちには何もないってのに……。」

”我” ”汝” ”喰”。”我” ”汝” ”喰”!!!。

「さっきから、そればっかだな」

どうする、前ならいざ知らず。今の、一般人と変わらない俺じゃあ。
第壹階級でも、絶対に負ける。
どうにか、どうにか手を考えなきゃ。

結果は——張ってある。それもさっきのとは比べモンにならないような……、きつとなのは達は気づかないだろうな。いや、気づかないであってほしい。今の彼女じゃ一発で……。

結果は、もう見えてるな。

敵は第壹階級ソルジャー一体。だけど第壹階級って言ったって、強さは……
だいたい、この世界で考えるのなら、A・S最初のなのはで辛勝つ
てとこ。まず今の彼女じゃ勝てっこない。

以上から考える、俺の取るべき手段は

？ 逃走。

？ 死ぬ覚悟で戦闘。

以上二つ。

まず、？はなし、俺が逃走したら、確実にこの世界が減ぶ。それに
代わりに闘うっても、この世界じゃ今現在時空管理局に頼るしかな
い。けどあいつ等が来るまでに、コイツは成長して手が付けられな
くなる。

ってことは……

「戦闘死ぬしかないっか。」

どうやら、相手も此方の考えてることがわかったみたいにな、こっち
に一直線に飛び掛ってくる。

俺は、それをギリギリで横に転がって

「ッ！、躲しきれなかったか。」

まだ体に慣れていない所為か、足をアイツの爪が掠った。それに、
転がって躲したからアイツとの距離が離れていない。

（傷はそんなに、深くないっ！！　けど、これじゃ次は避けられな
いかも）

「さて、どうしようか。こんな近距離。せめて、最後に一言ぐらい……」

残さしてくれるわけない、か。」

アイツはこっちを見下ろして、同じような爪での攻撃。第壱形態は単細胞な奴ではあるが、まったく同じパターンとは……

嘗められたものだ。

「ホント、第壱形態で助かったよ。」

俺は、右手と思わしきモノを振り上げたアイツのその腕の下をさつきと同じように転がりながら避け。そして怪我をしているため若干遅いが走って、アイツとの距離を取る。

「さっきのは危機一髪で避けれたけど。今考えなきゃいけないのは『どうやって倒すか』かな。」

考えたくないけど、ぶっつけ本番で神通力を試すしかないのか。

でも、どうやったら力を引き出せるか分からないし。普通の主人公ならこういうピンチの時に自然と目覚める筈だけど。

そんな気配も感じられない。

でも、それ以外に力なんて《加速》する力しかないし。

それに直接的な戦闘用でもないし。それ以前に、どうやったら使えるのか見当も付かない。

もう少し粘りながら、確率は低いだろうけど神通力の覚醒を待つしかないかな。

なぜ俺は初戦闘で、こんな博打めいたことやってるんだろう……、不幸だ。

「さて、この距離なら次の突撃で、どっちの腕を上げるか、よく見てからよけられ

”我” ”汝” ”喰”！。

悠夜の前方にいる第壹階級ソルジャーがそう叫んだ瞬間。その体表を突き破りその体内から、生々しい色をした何十、何百もの触手がありえない速度で、彼に向かって襲い掛かった。

転生してすぐさま能力の使うことのできる転生者ではないただの一般人とほぼ同等の体力、筋力しかない悠夜にとってその攻撃は、知

覚した瞬間すぐに走馬灯を見るのに十分すぎる攻撃であった。

つまり、彼は悟ったのだ。

現状、今この瞬間にたとえ加速してもあの触手から逃げることは出来ず、あのグロテスクな触手に貫かれ、己は死ぬのだと。

（さすがに、これは避けきれないか）

（ごめんな、・・・レイズ）

「ちょっと、待ったー！ー！！！」

走馬灯を見ている中でその姿を見れたのはおそらく、本物の神様のイタズラだったのだろう。

己のほぼ直上から自らの契約した神様が、今にも泣きそうな顔をして、両手を前に出して猛スピードで駆け下りてくるその姿。その姿を見ることが出来て、この少しばかりの時間でも再び生きることが出来て自分は幸せだ。

そう思い、自らを閉ざそうとした。

（レイズか……、少しだけ遅かったな。）

（もう・・・）

（でも、ありがとう）

”
■
■
”

（なんだ？ おかしい、俺は加速していないはずなのに、周りの景色が遅く感じる。）

” ■口 ”

（それに、周りの景色がだんだん暗く、そして紅く……）

” ■口 ”

” 視 ■ ”

” ■ ■ ”

（それに、さっきから聞こえるこの声）
（ずっと昔に聞いたことがある）

” 見口 ”

” 視 ■ ”

” ■口 ”

（そうだ、この声は）

” 見口 ”

” 視口 ”

” 観口 ”

（ハハッ、そうかよ。まだ俺に生きろって言うのか。お前は）

【汝望ム限り。我、汝ノ眼トナル契約】

（俺の望む限りか……）

（いいだろう。再び俺に力を貸せ！！）

「ああ、俺にお前の写す、その全てを 観せろ！！！！
グラム・サイト
妖精眼！！！！」

その言葉を叫び、転生者『黒羽悠夜』は、かつての仇敵であるBA
Gの中でも最も戦闘力のない第壱ソルジャー階級に貫かれた。



Side レイズ

今、私の目の前で

（ウソ……）

ユウヤが

ep.1 魔法の呪文はリリカルなの？ 前編（後書き）

原作なのはとはまだ顔合わせはしません。

とりあえず、ただ今後編を粉骨碎身で風邪引きながら執筆中です。
絶対に1週間以内には投稿するつもりなのでそれまでお待ちください。

では、また次回お会いしましょう。

ep.:2 魔法の呪文はリリカルなの？ 後編（前書き）

やっと書き終わったー！ー！ー！そんなもって大学がヤバイー！ー！

そして、遅れてスイマセン（・ω・）

そして、普段のレイズならば第壱階級ごときに遅れを取るようなことはなく、瞬殺できるのだが、この時は違った。

そう、レイズは悠夜が刺されたショックで何も考えられなくなっ
てしまっていたのである。

そしてこの時最も不味かったのは、第壱階級を目の前にして完全にレイズが戦意を消失したことである。いくら神の座にいる者とはいえ第壱階級1体に戦意を消失した状態で戦えば、その先に待つものは……死よりも残酷な現実であろう。

先ほどの第壱階級の話に付け加える事になるが、第壱階級は人と同じように本能的な欲を持つ。
それは――

戦闘本能に沿った『殺人欲』

貪欲なまでの『食欲』

そして……

自らの仲間を増やすために植えつけられた『性欲』。

実際、第壱階級は戦場で失った分を現地で補うことも視野に入れて創られているらしい。

その現場は、地獄の方がまだマシと言えるような惨状であることは確かだろう。

話は戻りレイズがこの叫び声をあげたその時、おそらく第壹階級は本能的にこう感じただろう。

『多少力はあるそうだが、戦う意思の無いとてもいい女が来た。』
と

そうなる、自然取る行動は1つ。

相手の持つ力を無効化するために、先ほどと同じ触手による遠距離攻撃。そしてもう先ほどの男に刺した触手も体に戻っている。

そして、第壹階級は自らの欲に突き動かされるように動いた。

~~~~~

一方、地面に着地したばかりのレイズは完全放心状態で、足に力はなく崩れ落ち頭は下を向き、そしてその眼には何も映ってはいなかった。そして悠夜のほうを向いていたために自らの背中を無防備にも第壹階級にさらしてしまっていた。

そして、彼女に無慈悲にもその先に待つ惨劇を予感させる様に、あまりにもグロテスクな大量の触手が彼女に襲い掛かった。



結果から、まず述べよう。  
彼女は触手に刺されなかった。  
それは、なぜなら――

「残念だけど、そうは問屋が卸さないんだよ。これがな!!」

触手に刺された筈の黒羽悠夜が、彼女を抱きながら全力で横っ飛びで回避したからである。

そして触手は目標に刺さることなく、代わりに地面に刺さることになった。

「えっ・・・？ ゆうや なの？」

「ああ、レイズの目が悪くなっていないのなら、俺は正真正銘君の知っている黒羽悠夜だよ」

「――――。」

「―――どうやら、世界はまだ俺を手放してくれないんだってさ。  
この眼を再び開眼させたのは『生き返ったのなら役割ぐらいはたせ』って言うことらしいよ。」

彼女を助けた悠夜の右目は紅く輝き、その周りの空間さえもうっすらと紅く染め上げていた。しかしそれはある意味で言えば、周りの空間がその紅に侵食しているとでも言えるのだろうか

「さっきの攻撃は、この眼のおかげでなんとか回避できたんだ。開眼した時にはもう接触まで残り2秒もなかったけど、その残り時間でできる最大限の回避を行って、結果なんとか2本もらうだけで済んだよ」

（もしも開眼してなかった時を考えると……。よそう、ミンチになった未来しか見えない）

そうやって、手早く自分が生きていることを彼女に伝えた悠夜は、彼女の方からまったくりアクションが飛んでこないことに気付き不審に思い、その顔を覗き込むように見た。

もしかしたら、全部避けきったつもりで実は1本もらってました、なんて話はゴメンだったからである。

「レイズ？」

だがそれはすぐに後悔に変わった。

そこにあったのは、綺麗な顔を悲痛に歪ませながらポロポロと涙を流している顔がそこにあったからである。

「――、悠や…ゆうやあ……」

その声を聞き、すぐに、慰めてやりたい気持ちで一杯だったのだ  
が……

「……ごめん。心配かけたな、レイズ。

でも、泣くのは邪魔者を排除するまでもうちよつと待ってな。」

そう言うのと視線をレイズから離し、体ごと顔を後ろに向け両目を  
不機嫌そうに細めながら「さつきからその攻撃する意思が、俺達に  
突き刺さって気持ち悪いんだよ。それに、この グラムサイト 右眼 であまり  
長くその気持ち悪い姿を見たくない。」と言いつつ放った。

はたして、その言葉の意味が能無に理解できたのだろうか？

——おそらく否、おそらく発声による空気の振動がたまたま戦  
闘本能を刺激したのだろうが、第壱形態もまた戦闘態勢をとり、ま  
た触手による攻撃を放とうと構えた。

それに合わせるように、体格差がありつつもレイズを真正面に、  
そして離れないように今の自分の腕で出せる全力の力で抱くように  
しながら、警戒をより一層高め。そして、相手の行動そのわずかな  
揺れすら見逃さぬように、妖精眼の瞳孔を開いた。

（俺が生きてるって分かったからレイズのメンタルも回復はしたけ  
ど……。

そんなに長くは闘えないかもな。ほんと戦いには向かない性格し  
てるよ、コイツは）

「だから……」



（でも、だからこそ）

「貴様を、」

（そんな君を守るためにも、俺は闘うんだよ！！）

「殲滅する！！」



”我” ”汝” ”喰”！！

その聞き飽きたような言葉と共にまたもや、グロテスクな触手が彼らに襲い掛かった。

（自らを中心とした場合。右14↘32。仰角36↘48。範囲攻

撃、危険度……Cクラス)

(回避パターン思考……完了)

「いくよ」

「きゃっ」

悠夜はレイズを今度は正面から抱き、自分が出せる限界の脚力でBAGと距離を離さないように回避した。実際体格に無理があるだろうが、そこは火事場の馬鹿力とも思えるくらいの脚力が出ていた。

「レイズ、今の俺じゃアイツを倒せない。だから」「私が悠夜の代わりに魔法を使えばいいんだよね」(フツ)……ああ！回避と戦術は俺が指示する。行くぞ！」

過去に一緒に闘った経験があるからだろうか、悠夜とレイズは少ない言葉でお互いの役割を確認し、BAGとの戦闘を開始した。

Side 悠夜

「レイズ、右4°。仰角8°。の方向に風魔法、真空波の刃を一迅、さらに右20°。30mまで移動。」

「うん！」

そう指示を出されると、レイズは風魔法の初歩中の初歩である真空波を無詠唱で1つ指示されたポイントに向けて放つと、ベストなタイミングでまたもやBAGが触手を放ちその根元から触手を断ち

切ることができた。そして、そのことを確認しつつ悠夜をその胸に抱きながら指示されたポイントまで強化した体で移動した。

無論、身を投げるようにした悠夜の時とは違い。速さ、安全性の面からしても上の回避行動であった。

（回避は問題ない、レイズの方もメンタル的には今はもってるけどなるべく早く休ませないと、ということは短期決戦が望ましいか）

（なら——）

「レイズ、その位置で詠唱開始。詠唱するのは一風属性中級範囲殲滅魔法」  
イバ

そう勢いよく指示を出すと、自分はレイズとBAGを繋いだ直線状に立ち、まるでレイズを守るための盾になるかのように自らの手を真横に伸ばした。

「えっ……悠夜？」「チャンスは1回。決めてくれよ！」うつ、うん  
「！！」

「さあ、来い」

『聖なる意思よ、』

（小細工なしでの真正面からの攻撃。それに、全ての触手をまとめて一極集中してきたか）

（盾があれば防げる、剣があれば切り裂く、魔法があれば消滅させるとかいろいろ手段は取れるけど、今の俺はどれも持たない無力な存在。普通なら、また貫かれるだろうけど……）

『我に仇為す敵を討て！』

（でも、なぜか今度は『貫……かれ……ない』と分かってしまう）

（接触まで、あと零コンマ……7秒）

（レイズの詠唱完了まであと……零コンマ5秒、発動までさらに零コンマ7秒）

（その零コンマ9秒を俺一般人自身が稼ぐ！）

『ディバイン・セイバー！！』

（俺が防がなきゃレイズに当たるし、俺が無事じゃないとレイズが悲しむ。そんなことはさせないし、したくもない！）

（だから、俺は……）

「守る！！」

S i d e o u t

——我が直系の力を継ぎし者よ。  
その『堅固たる守護』の強き意思に、  
わたくしは答えましょ

う。

《Trailblazer ~トレイルブレイザー~》？

——いえ、きっとあなたならあの姫<sup>コ</sup>達の信用も得られるでしょうから、このように呼びたいでしょうか。

——《星帝 ~Zodiacal kaiser~》——。

——あなたが、わたくしの在るこの地に参られることを、わたくしは待っていますよ。



『ディバイン・セイバー!!』

——風属性中級範囲殲滅魔法。  
ディバイン・セイバー

この魔法は、風属性の魔法によって発生した風を乱気流に変化させ、その乱気流内での風同士の摩擦によって生み出された静電気を主に魔力を使い剣の形に増幅・固定し敵の直上に落とすというものである。

なお、『ディバイン・セイバー』は風属性の魔法の中でも形態変化を用いた属性内亜種の部類の魔法であり、中級呪文なので切り札とまでは言えないが十分に主力として使っていけるレベルの呪文である。

また範囲殲滅と言うことから解る通り、この魔法は本来単体用ではなく周りにもダメージを与えることを視野に入れ、開発された魔法である。

たった今発動したディバインセイバーは第壱形態を完全に貫き、剣先が地面と接触し周りの地面を焦がした。さらに徐々に固定化の呪文の効力が弱まり固定されていた電撃が一気に解き放たれ、焼け焦がれていた地面ごと包み込むような光柱を発生させた。

第壱形態は剣が自らを貫き漏れ出していた雷撃にはギリギリ耐えたものの、その時点で全身のいたるところが焼け爛れており、所々欠落している部分があった。だが、剣の固定化が解かれ光柱が発生しその光柱がなくなると、そこには第壱形態のかけらも残ってはいなかった。

〃  
〃  
〃

話は戻ることになるが、この1秒にも満たない時のなかでレイズは《ディバイン・セイバー》を放ち、第壹形態は最後の攻撃を放っていた。

しかし、その最後の攻撃はというと――

「悠夜!!」

手を横に広げた悠夜のちょうど胸の辺りで触れるか触れないかのところで止まっていた。そして、その悠夜の体は薄いヴェールのようなものを纏っているかのように淡い光を全身から発していた。

攻撃を完全に受け止めたその薄いヴェールは、まるで魔力や気などを使得って発生させる防御障壁のようなもののようで、悠夜はそのヴェールに守られているかのように見えた。

「今のは……?」

（俺は……攻撃を受け止められたのか？　なんにも力のない、この体で!?!）

（それに、このヴェールのようなもの……　なんだ、これは？　妖精眼で見た感じ、物質化していないはずなのに、この桁違いな神秘を秘めたこのモノは!?!）



そうやって、自らの危機を救ってくれた得体の知れないものについて頭の中で考えている悠夜の後ろの方向から少し足取りのおぼつかなくて、顔をうつむかせたレイズが近づき、それに気付いた悠夜が振り向いた。

そして――――

「あ、レ「この、バカっ!!」」

(パシンッ!)

「ぶっ!!」

見事な平手打ちを頬にかましたのである。

見事に食らった悠夜は、発生した音の割に自分に対してのダメージが少ないことを不思議に思いながら、レイズに抗議しようとした時、今度は悠夜の胸のところに、レイズが顔を押し付けつつ何回も握ったこぶしで叩いてきた。

「バカ! バカ! バカ!」

「レイズ! いきなり、なにするん「ばか、ばかばか…ばかあ」…」

「わたし、わたししんぱいしたんだからあ。

また、またいなくなちゃうんだっておも” ったんだからあ……」

” 「バカバカ」 言って来たため、やはり今度こそ抗議を！」 と悠夜が思い、行動しようとした時。

だんだん自分の知っている凜とはつきりとした綺麗な声ではなく、今にも崩れてしまいそうな儂く脆い声に変化していることにやっと気づき、開いていた口を閉じ続けようといった言葉を飲み込んで、黙ってレイズが落ち着くまで待つて見ることにした。

また、自分の胸のところに顔を押し付けられているために、その顔を見ることは出来ないが、きっと他人には見せられないような涙やその他もろもろでグチャグチャになっていることだろう。と予測した悠夜は覗き込むような無粋な真似はせずに――

「ごめんレイズ。――――無茶してゴメン」

と言うと、体格差があるものの自分の手をめいっぱい広げ顔を見ないようにしつつ、その体を抱き寄せたのである。

その姿は第三者から見れば、本当に美しい母子の姿のように見えたことであろう。



なんとかレイズが落ち着き、そして「まだちょっと…顔合わせるにははずかしい／／／」

と言うことで、顔をなんとか見せられるというまで抱き合っていたんだが……

なんというか……、神社の境内でこうやって男女が抱き合っている姿って絵的に大丈夫だったのか!?

——ま、まあそんなことは置いておくとして／／

「なんとか顔を見せられるよ」と言ったレイズと少し離れて向かい合った。

なんか、前神界で会った時よりも俺が頑張ってレイズのことを見上げなきゃいけなくなっているのは何でだろう？

「それで、これからどうするんだ？」

「とりあえず、拠点に行こ。そこなら食べ物もあるし、休めるしね」

「ああ、分かった。」

それでさ、さっきの「ムゝ（へωへ＃）」その笑いながら殺気

送るのはやめて

もう十分に反省したからさ」

やっぱり無茶したからだろうか、レイズの機嫌がだいぶマイナス方向に振り切っているような……。

とにかく、さっきの戦闘の時に出了た ヴェールについてだ。

「さっきのって、一般人の体じゃ絶対に防げなかった攻撃だったよな。

でも俺は絶対に防げると思ったんだ。なんでかは分からないんだけど……、でも！確信はあった。それで、あのヴェールみたいなのがおそらく第壱階級の全力の力を受け止めた……。

——なあ、レイズ……これって「たしかに、今の悠夜は一般人と大差ない肉体だけど違う点が2つあるよね。」ああ、そうだな」

「一つ目は加速の力——でも加速じゃ防げない。

と言う事は、二つ目の力である「神通力か」うん、今現在はそれしか考えられない、よね？」

「でも、アレはなんか魔力や気を使つての防御障壁って感じじゃなかった、もっと根本的に違うような、そんな感じの——それにアレはまるで、身に纏うのではなく体全身を包み込むような鎧みたいな。そんな感じのようなものだった。」

「今はその話はやめよ？ いきなりこの世界に飛ばされて疲れてるでしょ？」「いや、だけど」早く拠点に行つてさあ、話しはそれからでも遅くはないでしょ？「で、でも」——ねえ？」

あ。やばい。これは、せっかく命の危機を数分前に脱出したって  
いうのに……。

それになんだろう？レイズの背中からなんか黒くておぞましいも  
のな上がつているかのような……。あ、走馬灯が見えた。

「ゆうや？ 休もうよ」

「はい、分かりました。申し訳ございませんでした。俺が全面的に  
悪かったですorz（早口＋土下座）」

「分かればいいの。」

一応先はまだまだ長いんだから、まだそんなに急がなくてもいい  
んだよ？」

「（前回と一緒にやってことだよ……）おっしゃるとおりで」

「それじゃ、行こうか！ 悠夜！」

そう言って俺に手を差し伸べてくるレイズ。こういうシチュエーションって普通逆なんだけどな…。まあいいか。

そして俺はその手を自分の手を上に伸ばして握った。

「あ！」

そこで、気付いてしまった。

「……。なあレイズ？」

あれ？中学生ぐらいの身体のはずなのに腕を上<sup>うへ</sup>に伸ばして??

「なにかな？」

「さっきから、ちよくちよく気にはなってたんだけど……」

「??:?」

そう、さっきからちよくちよく気になっていたこと、それは――

「なんか、俺――――身長縮んでない？」

「うん。今は小学3年生ぐらいの年齢まで下げたよ」

「Oh……、即答ですか」

どおりで体が動かしにくいと思ったわけだ……。まさか、また身長が縮んでるなんてww

それに、年齢まで下げたとは……。もう意味が分からない。身長だけ縮めれば同じだからいいじゃ「可愛くないでしょ！ それと気分で！」ん……。

なんだ？これ？ どうやって、どこからつつこんだらいいのか、俺にはわからない。

「ハハッ、 不条理だよ、この世界ってヤツァ……」

S i d e o u t

その夫婦漫才みたいなことが起こってから少したったとき神社の階段の下付近に偶々いた人は、やけに疲れている顔の整った子供と、綺麗な母親が手を繋いで階段を降りてきて、その後子供は座り込んでしまい少しその場で話をした後、子供はおんぶされて帰っていった。

た。

子供の方はおぶられている間ぐちぐちと文句を言っていたそうだが、他の人から見れば微笑ましい光景だったことを補足しておこう。



S  
i  
d  
e  
悠  
夜



——あの戦闘が終わり、レイズの機嫌を直してから拠点となる家に向かおうとした時、やはり子供の体と心で無理がたたったのだろう……。なんとか神社の階段を降りるのに精一杯だったみたいで降り終った直後、足に力が入らなくて立てなくなってしまった。

すると、レイズが「ほら悠夜？ おんぶしてあげるよ？」とか言い初めて、「さすがにそれは」とやんわりと断ったら「——だめ？」ってしゃがんで上目十涙目のコンボをくらって……。ベタと言えばベタなんだけど、あの攻撃のダメージはくらった奴にしかわからない。

結局、こっちが折れておんぶされて拠点に行くことになった。

「……………」

自分がとんでもない対男用兵器だということに気付いてないのがなんというか……。

そいて向かう途中、心身共に疲労感でいっぱいだったこととレイズの背中が温かくて寝てしまって、次に気がついた時はマンションで目の前にレイズの顔と豊かな母性の象徴が見えた。しかも結構近距離で、もしあと少しレイズが身を屈めていたら目覚めた時はまた神界だっただろう。

まさか、寝ている間に死の危険が差し迫っていたことにはビビった。『二度あることは、三度ある』とは、まさにこの事なんだろうけど……。

正直勘弁してください。

死因が『（母性の象徴による）窒息死』なんて、いくらなんでも死んでも死に切れないよ！！

「ねえ？ 夜？」

その後、マンションの間取りとかいろいろ確認してみたところ、飛ばされる元凶になったマンションと間取りはまったく同じだった。ただし、あの写真の部屋は中身が変更されていて、なんの変哲もないただの空き部屋になっていた。そして、体が小学生でも中身が大人な俺としては、とりあえず寝室のかいベツトはどうにかして欲しかった。

間取りの確認が終わったら、また少し眠くなったみたいで「ソファで少し仮眠をとるよ」、とレイズに伝えて…………

「ねえ！ 悠夜、聞いてるの！？」

そして、今この惨状に至る。

「うん、ほんのすこし、走馬灯を見てた現実から眼を背けてただけだから……」

「？ なんのこと？」

「いや、こっちの話だよ。それでレイズ、この食事って…………？」

「うん、私が作ったんだよ。結構良い出来でしょ♪」

「ちなみに、これはなに？」

「ステーキだよ」

おかしい！、なんでステーキなのに真っ青なんだ？ やけに鮮やかで青空みたいないい色してるけど……、って、そんなことは放って置いて！

それにこの異臭！硫黄のにおいの方が遙かにマシだぞ！？ なんだ！？ソースのにおいなのか？これは、ソースのにおいで本当にいいのか！？

（ハッ！！）

——そうだ、今思い出した。レイズの家事スキルは、ほぼ優秀。そう、ほぼ優秀なんだ。洗濯↑優秀、掃除↑優秀、買い物に関してはタイムセールを涼しい顔でこなしてくるほど優秀なのに……。

料理だけは……「食べてくれるよね、ちゃんと天界でも練習してたんだから！」……料理だけは超現実主義なんだ！！

どこぞの悪魔も驚くほどの昇天ペスカトーレを作るし、弁当なんて足が生えるなんてレベルじゃない！腕まで生えるからな！！まさに数々の世界の主人公をラスボス戦前で瀕死の状態までもって行ったコイツに付けられた称号は殺人料理人！！

殺人兵器

こんな料理ダークマター作るのは妹以来2人目だったぞ！妹の方は目玉焼きで暗黒物質創るのは当たり前、学校の調理実習では救急車が学校に何台も来たほどだったからな。それ以来、調理実習の時は隔離されて食べる専門だったっけ……。可愛かったなく春菜。

ああ、分かっているとも。もういい加減現実逃避はやめよう。とにかく、この目の前の惨劇カオスをどうにか処理しないと、そして明日からの料理も俺が作らないと明日と言わず今日からの俺の命がない！！せっかく助かったのにこんな終わり方はイヤだよ！？なんだ？やっぱり『二度あることは、三度ある』のか！？

「さあ、召し上がれ（＊、▽、＊）」

「……（どうする俺！　どうするんだ俺！！　どうしろってんだオレーーーー！！）」

「しょうがないな」

（なんだ？　やっと、あまりの見た目の酷さに気付いて片付ける気になってくれたのか？）

「はい、あゝん」

「（……そうか、神は死んだか。——上目＋甘え顔じゃ男に生まれた以上、断れないだろうが！！）」

（南無三、俺！！）

「——あゝん」

（ガリッ！！、バキッ！！　ギャ！、ギユ、ドエ！）

真っ青だった外はカリカリサクサク、中身はとろけるほどにジュシー。においは気になりはするが口の中だとそんなに気にするほどではない。一口一口ごとに溢れてくる肉汁もたっぷり、元々の肉

の旨味とこのソースの味が絶妙に混ざり合って、これは……

「…………。あれ？うまい。」

そう、うまいのだ！ この青空もビックリな真っ青としたこのステーキは……！

「だって、頑張って練習したんだもん」

「うん、おいしいな。」

その後、俺は見事にステーキ(?)を完食。

なんとか、食うことはできたけど若干嫌な予感が漂っている様な気もしたのだが、その時の俺はソファで体を休めても疲労感がどうしても抜けなくて、その事に気付くことは出来なかった。



そして夕食後……

「ああ、最高神のじいさん方に呼ばれて、だからあんなに遅かった

んだな」

「うん。最高神の方々も相変わらず元気だったよ。それにまた悠夜と会いたいわって仰ってたし」

「そうか。転生した俺が会った訳じゃないんだが、そう言ってくれるのは嬉しいな」

とりあえず、レイズの方から”なぜ合流が遅くなったのか？”についての話がある。という事だったので久々の談笑という感じになっている。

転生前の俺の記憶から、前世の時もたびたび最高神にはお世話になったと言うことが思い出せてるので、この後少しばかり俺の前世の頃の最高神と俺との絡みや少し昔のこの話になって脱線していた。

「————クスクス。そう言えばそんなこともあったね」

「あの時は大変だったんだぞ。いつの間にかトールの怒りに火をつけたみたいで、その後3日3晩ずっと闘いっぱなしだったんだし。おかげで神界にあった浮遊島——たしか日本の総面積ぐらいはあったかな？ それを一つを消滅させる結果になって、その後両者——俺は魔力、あっちは神力が切れてノックダウン。」

それで、たしか———そうだ、その後に待ってた……”制裁”イヤ、あれはもはやこの世のものじゃない。あんなのはもう制裁なんて言わないんだ。（ガタガタ）」

「まあまあ。でも、あれはさすがに浮遊島消滅は大人気なかったよ？悠夜もトール様も」

「それはもう、十分に反省してるよ」

「クスクス、そっか」

「――さてと、だいぶ横道にそれちゃったし、時間もう遅いから本題に入るね。」「(コク)」あの時呼び出されたのは、悠夜はもう勘付してるかもしれないけど”BAG”のことだったの。

最高神様はね

『もはや”BAG”に関しては、もはや我らの力の及ばぬ遙か高みへと昇ってしまったようだ。』

『此処まで力を上げられると、あやつが一体何なのかまったく分からなくなってしまうた。アレはもう世界とほぼ同義と呼べる存在じゃ』って仰ってたの」

「そうか、もうあの人たちでも分からない存在に成ってしまったのか。

――それで……やっぱ動くわけにはいかないって?」

「うん、やっぱりどうやっても自分達は干渉することは出来ないんだって。それにね

『今の奴には我らが束になっても敵わん』って……。  
何かの冗談かと思ったんだけど

『真実だ。現に今の我らは”BAG”が何処におるのかすら分から

ぬ』って言ってる……」

「状況は最悪だな。」

——それで俺が復活させられたわけだ。様々な平行世界、その全ての人類の中でただ唯一”BAGのコア”に傷を付ける事の出来た、この俺が……」

「そういうことなんだよね。実際悠夜が傷つけた”BAG”は今よりも少し——それでも絶望的な壁だけど 弱い感じだし、それを傷つけることの出来た、悠夜はやっぱり凄いんだよ。」

「そうか、俺はただ無我夢中だっただけなんだけどな。それでも、またこうやって生を受けれたんだからいいんだよな。」

「……………」

「レイズ、たぶんこの後続く話は辛いものなんだろう？ お前が話してる最中に下を向き始めるなんてそんな滅多なことじゃないからな  
「うん」……（スー、ハー）話してくれ、レイズ。たとえばどんな結果が俺の前に突きつけられても、もう俺は第壱形態と会ってしまった。もう俺の歩みを止めることは出来ないんだ。だから……」

「わかったよ、それで最高神様が最後にね。」

『お主の復活させた若者——今は悠夜と言うのかな？ その者の復活に関しては、此処神界でもトップシークレットで行われていたのだが、どうやら”BAG”が自らを傷つけた者の復活に勘付いた



らしくてな。しかし、やはりコアに傷を付けられたのが痛かったのだろうが、本体が直接動くようなことはなく、自らの下級存在を動かしたことがなんとか最後になんとかわかったのだ。』

『奴はどうやらまた悠夜殿が力を付けて自分に刃向かって来るのを本能的に恐れたようじゃ。よって、力を付けさせぬように、またあわよくば人質にでもしようと思ったのじゃろう。』

『過去の彼が深く関わったであろう世界を、手中に収めるつもり  
のようだ』

『それに、どうやら我らの転生システムを悪用し自分にとって都合のいい転生者を送り込むようだね。女の子の多い世界なんて惚れさせちゃえば、あとは奴隷にし放題だしね。』

『——ごめん、気分を悪くしたみたいだね。でも残念ながら事実なんだ。』

『我らはそのような世界にとって悪しき者になるであろう種は転生システムで送らないようにしているし、送った後のアフターサービスもやっている。だが、おそろく……』

『アレがそんなことをするとは思えませんし。それに、彼の関わっ

た世界には道筋物語があります。それを乱されれば……』

『世界が壊れる。それだけではどうやっても防がねばなるまい』

『よって、だ。レイズ・A・V・E・ネフィリーゼ。並びに、今こ  
こにはおらぬ黒羽悠夜。』

汝らに、我らが勅命を言い渡す。』

『汝らには”BAG”を殺す。という命に加え、汝らの関わった世  
界に対する異常者の排除、それによる世界の安定という命を下す』

『本来ならば我らが行うべきであろう事柄を、汝らのような若者に  
このような事を頼むのは間違っであろうことは、分かっておる』

『それでも——命を遂行してください。お願いします』 っ

私初めてだったんだ——イヤ、誰でも初めてだろうけどあの部屋で  
最高神の方々全員が頭を下げるなんて……。なんか感動とかよりも  
先に恐怖が込み上げてきちゃったよ」

「———そうか」

「そ・れ・で、どうするの?」

そんなことは分かってるくせに聞いてくるんだよね、この神様は。

そう、そんなことの答えはもう決まってる。

「受けるに決まってる。

これ以上”BAG”と関わって不幸になる人を出すわけにはいかないんだよ」

「うん！そういうと思ったよ♪

それで、具体的にはこれからどうするの？」

「明日から、修行開始だな。あのとき出たあのヴェールのようなもの……。あれはもしかしたら神通力なのかも知れないし。

とにかく、明日から頑張ろう！」

「それじゃ、明日のために今日はもう寝ようか？」「えっ！？レイズ？」「ふふっ、一緒のお布団なんて久々だねっ」

……。もう何も言うまい。

ちなみにナニもなかったことは言っておく！レイズはシヨタ持ちじゃないらし「かわいいなっ、この身長の悠夜っ」……持ちじゃないことを祈ろう。

明日からの修行。きっと今までにないくらい厳しいものになるだろうけど。俺は屈したりはしない！

S i d e o u t



ちなみに余談だが、この次の日俺は腹痛に悩まされトイレから3時間出れなかったことを記述しておく。原因は——言う必要もあるまい。

その日からレイズには食器、食材を洗う、食材を切るしか役目を与えなかったことも記述しておこう。本人は大いに不満顔だったが……、一緒に料理することが出来て一応は嬉しいようだった。

## e p::2 魔法の呪文はリリカルなの？ 後編（後書き）

作中に出てきたステーキ・・・。

現実にはあってほしくないですね。こういうところは空想の産物で済まされるからいいですね。

なぜ真っ青か、と言うことに関しては某TV局でやってる「○○レストラン」から引っ張ってきました。タイトルだけ。ちなみに作者は毎週欠かさず見てます。

理由は、？宮川がもしろいから…3割。？奈々声目当て…7割。な感じです。

さて、やっと『魔法少女リリカルなのは』編に入りました。これから、大学の方も忙しくなるので、ただでさえ遅い更新ペースがもっと遅くなるでしょうけど、頑張って書き続けます。

それでは、次の話は修行と繋ぎメインでお送りする予定です。では、感想，アドバイス，誤字脱字報告，等はいつでもお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9064u/>

---

黄道ノ主

2011年10月10日02時58分発行